

「やってみよう」

仲間と運動（遊び）に親しむ児童の育成

大分県大分市立別保小学校

全校児童数	911名(男子446名 女子465名)		
全クラス数	36	教職員数	60名
体育専科教員訪問学校数			1校
訪問校	大分市立鶴崎小学校		
体育専科教員名		手嶋 孝則	

Plan：取組時の課題と計画

1 取組時の課題

◆新体力テストの結果

- ・全国平均以上は60/96(62.5%)であった。
- ・50m走、20mシャトルラン、立ち幅跳びが課題である。

◆運動に対する「愛好度」

- ・「運動すること、体を動かすこと」が楽しいと感じている児童は90%であった。学年が上がるにつれ、運動自体を敬遠している傾向がみられた。また、日々の運動習慣では、二極化している傾向が見られた。

2 取組の計画

- ①全校統一の準備運動の実施
- ②保護者に向けた体育通信を発行し、児童の様子を知らせた。また、月ごとに体力向上に向けた家庭学習を出し、保護者と連携した取組の実践
- ③授業の情報提供（場の作り方、ルールの工夫、評価の観点など）
- ④授業時間、運動の日程設定
- ⑤別保小体育科スタンダードの設定
- ⑥毎月の体育部会での体育授業における情報交換（専科不在の時は別日に学年部会へ参加し情報交換）

Do：実践内容

1 準備運動の統一

- ①担任（T1）と体育専科（T2）の役割分担をしながら授業実践ができた。
- ②全校で指導の統一化

2 家庭との連携

- ①保護者に向けた「体育通信」で家庭と連携した取組を実践した。（あくりよく名人、やわらか名人など）
- ②授業の様子を写真で周知
- ③生活習慣の課題も連絡し、睡眠時間やスクリーンタイム等家庭でのルール作りや実態把握を行った。

3 授業改善に向けて

体育専科教員の指導法（工夫した場、ルールの工夫など）を体育部員中心に共有した。

- ①合同体育でも運動量が確保できる工夫した場の共有
- ②自分の姿を客観的に見たり、前時の課題を確認したりするために1人1台端末の活用、低学年児童はワークシートの活用
- ③校内研究の「書く力の育成」を意識したワークシートなどによる振り返りの充実

4 休み時間の運動啓発

- ①外遊びの推奨
- ②委員会活動の創造活動

●工夫したこと（&苦勞した点）

①準備運動の統一

- ・先生も児童も戸惑わずスムーズに授業参加できた。
- ・児童の当番活動など自主的に進めていく姿も見られた。

②家庭との連携

- ・新体力テストの項目を意識しながら、家庭学習で保護者と共に実践できる内容にした。
- ・児童の家庭での過ごし方を担任が把握し、保健指導へとつなげることができた。長期休業前にスマホやタブレットの使い方を指導できた。（情報モラル）

▲提出状況が65%と高くなかった。保護者へ協力や周知が足りなかった。

③授業改善

- ・工夫した場を設定し、どの児童も自分の力にあった場を選び運動することができた。また、ボール等、用具を1人1つ準備し、自らが「選ぶ」ことで主体的に運動に取り組むことができた。
- ・ワークシート、1人1台端末を活用し、振り返りの充実を図ることができた。

▲愛好度が90%と高いが、そうではない児童との二極化が進んでいる傾向にある。どの年代においても「やってみよう」と参加し、楽しさを味わわせることが課題である。

④運動の啓発

- ・委員会の児童、担任が積極的に声をかけることができた。

Check：取組の成果

- ①新体力テストの結果が48.96%→62.5%と上昇した。
- ②運動への愛好度が90%と高くなっている。
- ③教職員アンケートで「運動量のある体育学習の実施」が98%と高くなっている。

Action：今後の課題

- ①大規模校の運動量を確保するための運動の時間、場の確保
- ②休み時間の「運動の日常化」
- ③保護者と連携した取組の実施・継続
- ④愛好度の維持・上昇のための体育授業の在り方

◎体力向上の取組がもたらす波及効果

- ・多くの場、用具により「やってみよう」という挑戦する意欲の高まり
- ・体育を通じて集団での過ごし方、ルールを守り楽しんだり、喜び合ったりすることを味わう
- ・家庭との連携 ・教職員の授業力向上

